

3 月 期

〈出典一覧〉

国語 小松田儀貞

国語 湯川秀樹

『社会化するアート／アート化する社会—社会と文化芸術の共進化』一部改変

『湯川秀樹 詩と科学』

水曜社

平凡社

問2

次の文の空欄 ・ にはいるものを、それぞれア～エの中から一つ選び、その記号をマークしな
さい。解答番号はX― Y―

選手交代が を奏して、逆転勝利を収めた

ア 好 イ 巧 ウ 抗 エ 功

いつまでたっても答えを得られず、 を煮やしている

ア 腹 イ 業 ウ 肝 エ 興

問 7

⑤ 具象以前の世界は初めから問題になっていない」とあるが、そのように評される新聞・ラジオ・テレビ等が伝える情報の性質として、適切ではないものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 22

- ア 人類の進歩・飛躍のような、目に見える成果を伝える
 イ 誰かを取り上げる際にはその業績のみを伝え、その人の苦心を伝えない
 ウ 外から見えるものだけを対象として、あらかじめ選ばれた情報である
 エ 万人にとって均一な伝達方法であり、受け手個人の特殊性を考慮しない
 オ 自分と縁遠い人や出来事を、身近に感じさせる

- 17 -

問 8

⑥ 情報伝達だけではない」とあるが、本文が発表されたのは二十世紀、コンピュータが開始の時期であり、SNS や生成系 AI 等は存在していなかった。現代における SNS 等による情報伝達の変化について述べた以下の文章の傍線部ア～オのうち、二十世紀の新聞・ラジオ・テレビにおいても実現できていたものを一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 23

SNS の登場によって、情報伝達のあり方は大きく変わった。各個人が自由に情報の発信を行うことが可能になった結果、(ア) 発信される情報はほぼ無制限と言えるほど多様化した。受信面においては、フォローやグループなどの形で、(イ) 無限に近い選択肢の中から受け取る情報を自分で決めることができる。発信者と受信者の断絶が解消され、双方向で (ウ) 各人の志向性に応じた情報のやり取りができるようになった。(エ) 物理的な距離を解消し、対面での面識がない人の情報に触れることを容易にした SNS の存在は、その気軽さと多様性ゆえに、(オ) 有名でもない、世界中の無数の人々の内面をも知る機会になりうるかもしれない。

問 9

- ⑦ (二) が指す内容として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 24
- ア 機械の計算では導き出せない発見
 イ 科学や芸術の発展に寄与する取り組み
 ウ 人間が内包している具象化以前の世界
 エ 明確な形態を与えられるべき混沌
 オ 創造の意志とそれに伴う苦心

- 18 -

問 10

本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 25 ～ 29

- 25 長い間、心の中で暖めていた着想・構想が一つの具体的な理論体系にまとまった場合は、「具象化」が実現できた事例にあたる
 26 筆者はかつて、長年の努力が実を結んだ時に大きな喜びを感じていたが、年を重ねるにつれ、そのことには喜びを見出せなくなった
 27 科学者のみならず画家や彫刻家も、内なる混沌から、明確な形をもつたものを外へ生み出そうとする苦しみと向き合っている
 28 具象化以前の世界は、本人にとっては人生の意義に直結し、本人以外の他者にとっては意味を持たないという二面性を持つ
 29 理想的な形態を現実化することにとられず、具象化以前の世界を豊かにしていくことで、人生はより意義深いものとなる

- 19 -

問 11

この文章の筆者である湯川秀樹は、一九四九年にノーベル物理学賞を受賞している。日本人のノーベル文学賞受賞者の作品を次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 30

- ア 浮雲 イ 青年 ウ 刺青 エ 雪国 オ 斜陽

第三問

次の問いに答えなさい。

問 1

次の傍線部に相当する漢字を含むものを、それぞれア～エの中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 31 ～ 33

- 31 自然の美しさをキョウジュする
 ア キョウシユウに駆られて涙が出る
 イ 友人にキョウチュウを打ち明ける
 ウ キョウラク的な生活を送る
 エ 事業の担当者とキョウギを重ねる
- 32 約束をリコウするために努力する
 ア 企業のリジュンを最大化する
 イ 自然のセツリに従って生きる
 ウ 必修科目をリシユウする
 エ 現状は報道とヒョウリを成すものだった
- 33 生徒への注意カンギを図る
 ア 証人をカンモンして説明を求める
 イ 信念をカンテツし、困難に立ち向かう
 ウ カカンに挑戦を続けて成功を取める
 エ これまでの政策をテンカンする

- 20 -

えて、あらかじめ選択された情報を万人に同じように与える作用をも持っている。それは既に具象化されたものの中からの選択である。具象以前の世界は初めから問題になっていない。

情報伝達だけではない。人間の頭脳の機能の一部までも機械が受けもつてくれるようになってきた。しかし、そういう機械もまた、既に具象化された知識を適当な記号の形に変えた時にだけ質問として受け入れてくれるのである。そしてその機械が与えてくれる答えもまた、具象化された知識に関するものだけである。

人間は具象以前の世界を内蔵している。そしてそこから何か具象化されたものを取り出そうとする。科学も芸術もそういう努力のあらわれである。いわば混沌に目鼻をつけようとする努力である。人生の意義の少なくとも一つは、ここに現れ出せるのではなからうか。

(湯川秀樹『湯川秀樹 詩と科学』)

注

* 天の羽衣がきてなる……天人が百年に一度降りてきて、羽衣で巨大な石を一回なでる。それを繰返してその石がすり減ってなくなるまでには相当な時間がかかることから、非常に長い時間が経過することのたとえに用いられる。

- 13 -

問 1

a・bと同じ読み漢字として、それぞれもつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。
解答番号は a 15 b 16

15 飛躍 ^a	ア 掲揚	イ 厄災	ウ 訃宣	エ 貸借	オ 抑留
16 画期 ^b	ア 脚 _カ 下	イ 滑 _カ 脱	ウ 格子	エ 濁水	オ 角 _カ 逐

問 2

ゆきつもどりつ^①とあるが、この語の意味に近いものとして、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 17

ア 低回	イ 精進	ウ 重複	エ 廣心	オ 確執
------	------	------	------	------

問 3

空欄 X^②にはいる語として、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 18

ア 永遠	イ 無関係	ウ 大げさ	エ はるか	オ まれ
------	-------	-------	-------	------

- 14 -

問 4

「百日の労苦は一日の成功のためにある」について、筆者は年とともに、それとは反対の方向に傾いてきたと述べている。ここでの「反対の方向」とはどのような考え方が、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 19

ア 一日の労苦は、百日の成功のためにある
イ 百日の労苦は、一日の成功をまたげる
ウ 百日の労苦と一日の成功は関係がない
エ 百日の労苦そのものに価値がある
オ 一日の成功そのものには価値がない

問 5

自分自身が失われてしまふ^③とはどのようなことか、その説明として、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 20

ア 自分以上に苦勞した多くの他者と比較し、自分の苦勞が意味のないものと思えてしまふ
イ 本来自分が関心をもつて取り組むべき対象について考える時間がなくなってしまう
ウ 情報が多すぎて、どの方向で苦勞すれば成功するのかわらなくなってしまう
エ 自分ひとりの能力がきわめて限られていると感じ、自分に価値を見出せなくなってしまう
オ 自分の存在が、似たようなことをしている多数の人たちの中に埋もれてしまふ

- 15 -

問 6

外から見て、離れて見て、ある人の評価をするだけではない^④とあるが、ここでの筆者の考えとして、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 21

ア 成功という、良い結果が出た瞬間をもつて評価することは公正な態度とは言えないため、結果に惑わされるような見方は避けたい
イ 科学者の人生の大半は、無意味なエネルギーの浪費に終始しているため、そちらを対象にした方がより正当な評価ができる
ウ その人が何のために努力しているか、何を苦勞しているかという過程こそが大切であり、成果や業績で評価すべきではない
エ 幸運に恵まれずに一生を終えることになった人たちが研究者として評価されるために、彼らの内面の世界に目を向けることを勧めたい
オ 成功をもつて評価する姿勢を否定するものではないが、その人の世界を知りたいという関心からは、それは絶対的な価値をもつものではない

- 16 -

問 7

市民社会の⑤一つの成熟とあるが、成熟した市民社会とはどのような社会か、その説明にあてはまらないものを次の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 8

- ア 一見すると民主主義の理念と矛盾をきたすようなアートの複雑なあり方にも理解を示す社会
イ 対話の契機として「批評」や「批判」を取り込むことで、アートの発展や豊饒化を促す社会
ウ たとえ異なる価値が相克・対立する状況であっても、あくまでも宥和的な調和を目指す社会
エ 電凸のような手段に頼ることなく、論争的であっても対話的過程を経て意見対立を乗り越える社会
オ アートの公共性について、市民全員がアートを受容しなくてもよいという柔軟な考え方を持つ社会

問 8

彼我^⑥とあるが、この文脈における彼我とは何か、もつとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は 9

- ア 民主性と公共性
イ プロジェクトとクレーニヒ
ウ クレーニヒと一般大衆
エ アーティストと市民
オ ミュンスターと日本

問 9

本文の内容と一致するものには①を、一致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 10 ～ 14

- ⑩ アートに対して受け止め方がさまざまなのは、作り手の表現手段が複雑に多様化したからである
⑪ 文化芸術活動において、作り手の表現行為は常に社会の価値観に従うべきであるとの考え方は誤りである
⑫ 意見や見解が競合・対立する状況下でそれを安易に回避しない姿勢には、市民社会としての成熟が見える
⑬ 《多様性》の理念は複雑で、その理解が社会の民主主義、ならびに文化についてのジレンマの解決策につながる
⑭ 「ミュンスター彫刻プロジェクト」の成功は、作り手・受け手双方の個性や立場を尊重する姿勢がある故である

- 10 -

第二問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、*印の付いた語等については、注を参照しなさい。

人生の最も大きな喜びの一つは、年来の希望が実現した時、長年の努力が実を結んだ時に得られる。私のような研究者にとって、長い間、心の中で暖めていた着想・構想が、一つの具体的な理論体系の形にまとまった時、そしてそれから出てくる結論が実験によって確認された時に、最も大きな生きがいを感じられる。しかし、そういう瞬間は、私たちの長い研究生活の間に、ごくまれにしか訪れない。私たちの人生のほとんど全部は、同じようなことのくりかえし、同じ平面の上でのゆきつもどりのために費やされしめる。日々の努力によって、相当前進したつもりになつていても、ふりかえてみると、結局、同じ平面の上の少し離れたところに着いているに過ぎないことを、あまりにもしばしば発見する。一つの段階からもう一つの段階に飛びあがれるのは、それこそ、天の羽衣がきてみだるほどに、Xなことである。

そんな人生の大半は、小さくいえばその人の個人としての進歩・飛躍^①、大きくいえば人類の進歩・飛躍とは無関係な、エネルギーの消費に終始しているのであらうか。決してそうではないように思われる。むしろムダに終わってしまったように見える努力のくりかえしの方が、たまにしか訪れない決定的瞬間より、ずっと深い大きな意味を持つ場合があるのではないか。ずっと若いころの私は「百日の労苦は一日の成功のためにある」という考えに傾いていた。近年の私の考え方は、年とともにそれとは反対の方向に傾いてきた。それに伴って、真理の探求の道を歩いた多くの科学者に対する私の評価も、昔と今とで大分違ってきた。

ある科学者が画期的な発見をするとか、基本的に新しい着想から出発した、ある学説を提唱するとかした場合、私たちはもちろん、その学者を高く評価する。一言にしていえば、科学者をその業績によって評価する、それは確かに公正な態度である。どんなにその学者が苦心さんたんにせよ、そこから独創的な業績が生まれなかったら、多くの場合、私たちはその人の価値を認める正当な理由を持ち得ないであらう。それはそうに違いない。しかし同時にそれは、外から見た時の、やや離れて見た時の評価でもある。

- 11 -

ところで、私たちは自分以外の学者の大多数が、という苦勞をしているのか、何に苦勞をしているかを知らない。自分の身近の少数の学者について、あるいは遠くにいる学者がある大きな成功を取った場合についてだけ、それらの人々の苦勞を知らされたり、関心を持つたりするのである。一人の人間の能力はきめて限られている。自分以外の多数の人たちの苦勞に、一々関心を持つていたのでは、自分自身が失われてしまふであらう。それもその通りである。

しかし、それにもかかわらず、私は近來、外から見て、離れて見て、ある人の評価をするだけではないということ、ますます強く感じるようになってきた。ある人が何のために努力しているか、何を苦勞しているかという面を、もつと重要視しなければならぬと思うようになってきた。天の羽衣がきてみだるという幸運は滅多に來ない。一度もそういう幸運に恵まれず一生を終る人の方がずっと多いであらう。しかし、だからといって、そういう人の人生は無意味であったとは限らない。他人は知らなくても、その人自身は何かについて苦心をしつづけていたかも知れない。その「何か」が重要なことであつたかも知れない。「どんな風」に「苦心」したかが重要であつたかも知れない。

絵をかく人は、絵になる以前のイメージを自分の中で暖ため育ててきたであらう。彫刻家は素材を前にして、まだ現実化されない理想的な形態を思い浮かべているであらう。科学者の研究が一応完結するまでに、一編の論文となるまでに、どんなに長い間、生みの苦しみをにつづけてきたのか。ついに絵にならないう場合、ついに彫刻が完成しない場合、論文が出版されない場合、それがどんなに多いか。外から離れて見る者にはわからない。いざそれは具象以前の世界である。混沌から、ある明確な形態をもった物が生まれるより以前の世界、生まれようとしている世界である。その人自身にとって、また深い関心をもって、その人の世界を知ろうとする人にとって、それは無意味な世界ではない。

科学文明の発達の結果として、情報伝達の方法が急激に変化してきた。新聞・ラジオ・テレビ等を通じて、私たちに与えられる情報が、ますます重要となり、私たちに圧倒的な影響を及ぼすようになってきた。それは一方で、遠く離れたところから起こった出来事、自分と直接関係のない人々を、身近に感じさせる作用を持っている。他方では、しかし、情報を受けとる個人の特殊性を越

- 12 -

* ミュンスター彫刻プロジェクト……ドイツのミュンスターにおいて、一九七七年以来、十年に一度開催されている現代彫刻プロジェクト。
 アーティストを街に招聘し、美術作品と特定の場所を結びつけて製作、旧市街や公園など街のいたるところに作品が設置される。
 * キュレーター……美術館や博物館で作品の収集や展示、管理などを行う人

問 1 a と同じ読み漢字として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ①

- ① 萎縮 ア 居留 イ 嫌忌 ウ 依拠 エ 不剔 オ 市井

問 2 理性^bの対義語として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ②

- ア 天性 イ 知性 ウ 習性 エ 悟性 オ 感性

問 3 ① われわれの社会の民主主義そのものに問わる大きな出来事であったことは確かだろう」とあるが、「表現の不由由展・その後」のどのような点が民主主義に関わる問題であったと言えるか、その要約として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ③

- ア アートの表現が政治に対する批判を含んでしまった点
 イ アートへの批判から深刻な政治対立が生じてしまった点
 ウ アートが持つ激しい批判や非難にさらされた点
 エ アートへの公的支援など、政治問題にまで及んだ点
 オ 政治がアートに優先するという見解が持ち込まれた点

問 4 ② 理念としての多様性と現実としての多様性は区別されるべき について次の問いに答えなさい。

(1) なぜ二つの多様性は区別されるべきなのか、その理由として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ④

- ア (多様性) には互いに尊重することだけではなく、敵対・葛藤の契機も含まれていることを看過してはならないから
 イ (多様性) の語や概念そのものについての対象や範囲がまだ十分な社会的認識を得ているとは言えないから

- 6 -

- 5 -

- ウ コンフリクトとコンセンサス、両方の多様性を備えなければ本当の意味での「多様性」とは言えないから
 エ 対話的な過程を模索するためには対立的な状況での論争こそが欠かせないが、その機会が理念にはないから
 オ (多様性) を社会的現実の複雑さとして受けとめないと、各人の差異性や個性の尊重を求める理念は成立し得ないから

(2) 傍線部②と、「表現の不由由展・その後」に関する記述内容との関係についての説明として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ⑤

- ア 「表現の不由由展・その後」で生じた意見対立は、「理念としての多様性」に該当する
 イ 「表現の不由由展・その後」で生じた意見対立は、「現実としての多様性」に該当する
 ウ 「表現の不由由展・その後」で生じた意見対立は、「多様性」が成立していない状態と見ることができ
 エ 「表現の不由由展・その後」で生じた意見対立は、「多様性」によって解決できると述べられている
 オ 「表現の不由由展・その後」で生じた意見対立は、「多様性」の概念とは無関係の問題である

問 5 ③ 帰趨³の意味として、もっとも適切なものを次の中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ⑥

- ア 行きつくところ(行くこと) イ 本来の位置(居ること) ウ あるべきところを探ること
 エ かたをつけること オ すりあわせること

問 6 ④ アートの複雑さ⁴とあるが、この文脈における内容を述べたものとして、合致する組み合わせを、あとのア～オの中から選び、その記号をマークしなさい。解答番号は ⑦

- (a) アートは一般大衆に向けられ、批判にも開かれているが、すべての人に開かれているわけではない
 (b) アートは民主主義的な資質を利用することも大切だが、市民が民主的とは限らない
 (c) アートは税金で賄われ、公共性が求められているが、美学においては譲歩すべきではない
 (d) アートは傲慢ではなく一般大衆に開かれたものでなくてはならないが、大衆主義に堕してはならない
 (e) アートは批判に対して開かれているべきだが、その社会の成熟度によっては開き方がない

- ア a・b・c イ a・c・d ウ a・d・e エ b・c・d オ c・d・e

- 8 -

- 7 -

第一問 次の文章は文化政策について論じたものである。これより前の部分で先行の研究を引用しつつ、「文化の民主化」

（近代の歴史と階級によって培われたエリート¹の文化的価値に人々を接近させる政策）と「文化デモクラシー」（あらゆる人が文化の受け手、作り手となることを重視する政策）は、それぞれ前提としている「文化」が合致するとは限らないとのジレンマを抱えていると述べている。これを踏まえた上で続く文章を読んで、あとの問いに答えなさい。
なお、*印の付いた語等については、注を参照しなさい。

今日の「アート」は、多様な主題や手法から生まれている。アートは、単に「美」の追求としてあるというよりは、ジェンダー、エスニシティ、セクシュアリティ、差別、戦争、紛争、自然環境等々、扱われる主題は社会的課題や政治問題として論じられるものも含め、ますます多様化し、表現形態もインスタレーションや映像、パフォーマンス等々拡張し続けている。しかしながら、誰もがアートが主題化する対象や問題に興味関心を持つとは限らないし、それらの表現に必ずしも受容的に向き合うわけではない。そこにはさまざまな視点、見解、感性があり、趣味、美意識はもちろん歴史認識や社会観など価値をめぐって対立する要素も含まれるだろう。作品や企画そのものも賞賛されることもあれば批判されることもある。そもそも創作行為・表現は、文字通りの政治権力から社会関係の力学のようなものまでを含んだ狭義広義の《政治》と切り離すことは難しい。現代のアートは基本的に「自由な表現」として提示される以上、ボジティブであれネガティブであれ受けとめ方がさまざまなものであるのは当然だろう。とはいえ、激しい批判や非難が表現そのものを否定し公開の機会そのものを奪うこともある。

「あいちトリエンナーレ2019」の企画展「表現の不自由展・その後」が、その表現をめぐって批判・抗議と脅迫を伴う電話が殺到したこと（いわゆる「電凸」）を受け、開幕から数日後に中止となった事件は、「表現の自由」と文化芸術の公共性をめぐる社会的な議論を呼び起こした。ここで生じた対立は短期間では収まらず、関係自治体や政府、関係省庁の責任、公的支援のあり方をも問う問題へと発展した。「芸術とは何か」が問われ、補助金不交付問題が係争化、文化行政が「政治問題」化したことを考えれば、

「文化の民主化」と「文化デモクラシー」のジレンマ問題という以上に、文化芸術活動の縮小にもつながりかねない。われわれの社会の民主主義そのものに關わる大きな出来事であったことは確かだろう。

端的に言えば、ここには「公」と「私」の関係性の問題——正確には、それをどう認識するかという問題——がある。ここで生じた対立は、そのまま公／私の関係性についての認識のずれの違いの問題にほかならない。企画展の批判者の論理には、「公」と「私」の硬直的な対立構造が見て取れる。「表現行為は私的なもの（私利に過ぎない）」という前提で、公的なもの（ここでは「国家」と同一視される「公」）が「私的なもの」に優先する、あるいは「私」は「公」に回収されるべきものという構図が粗野な形で持ち込まれているように見える。

意見や見解が競合・対立する状況——相異なる価値が相克・対立する状況にどのように向き合うかという問題は、政治におけるそれと変わるところがない。これをいかに調整するかという問題は当該社会の市民社会としての成熟度の問題でもある。ただ対立を回避してそこに予定調和的収束を期待するのは安易に過ぎるだろう。

近年、《多様性》は「多様性を認め合う社会」の実現を求める主張に代表されるように、各人の差異性や個性を尊重することを求める理念、追求すべき価値として念とところで強調されている。しかしこの語の概念についてはその対象や範囲の点でまだ十分に社会的共通認識があるわけではない。われわれはこれをまず社会的現実の複雑さとして受けとめるべきだろう。理念としての《多様性》に諸個人の有和や寛容を期待する人は少なくないが、そこには敵対や葛藤の要素があることも一つの現実なのである。現実の多様性にはコンフリクトとコンセンサスの契機が共に内包されている。この意味で、理念としての《多様性》・現実としての《多様性》は区別されるべきであり、その上で、われわれは対立的な状況の中で、論争的であっても対話的な過程を模索することを諦めなければならないだろう。「文化の民主化」と「文化デモクラシー」の構図もその点にかかっている。この問題のゆくえはわれわれの社会の民主主義のゆくえとも重なるだろう。

近代市民社会において、「批判」は対話・討議の契機であり民主主義の過程の重要な要素でもある。文化芸術についても「批評」

- 2 -

- 1 -

や「批判」を欠いてその発展や豊饒化は考えられないだろう。作品・作家が批判・批評に開かれていることは、文字通り「公共性（the public）」の理念と深くつながるし、批判の理性の主体としての「公衆（the public）」の存在は、近代市民社会存立の条件でもあった。文化芸術は公共性の問題である限り政治の問題となる。公共性と公衆の問題は極めて重要だが、とはいえ、「公衆」あるいは「世論（public opinion）」を一枚岩的に考え、近代」と今日の社会的時局的文脈を無視する議論は粗雑に過ぎるだろう。歴史的位相の問題性には踏み込まずその議論は別の場に譲るとして、ここでは改めて現代のアートの現場に目を向けた。

歴史あるアートプロジェクトの一つである「ミンスター彫刻プロジェクト」（ドイツ・ミュンスター市）は、市が公共空間に設置した抽象彫刻に対し市民から場々不愉快と非難の声が上がったことがきっかけになって始まったという。このキレターの一人スバー・クニヒ（Süß）は「芸術の民主性と公共性」について問われ、以下のように語っている。

民主性とアートは共存するものではないと思います。傲慢ではなく、オープンに、そして誰かを差別することなく、しかし同時に批判的であるという、民主主義的な資質を利用することは大切だと思います。ただ、アートは、アートに興味を持つ人々へのみ開かれるのです。いっぽうで、アートは社会にとつていいなんのかというアートの自己の意義を変えていくことにも興味を持っています。複雑なことですが、複雑なことは良いものだと思います。アートは一般大衆向けであるべきですが、それが大衆主義になつてはいけません。その美学においては、譲歩すべきではありませんが、傲慢であつてもいいかもしれません。（美術手帖）1055号（2017年1月号）インタビュー・文かないみさ

「アートと民主性は共存しない」「アートは、アートに興味を持った人へのみ開かれる」という、民主主義や自由主義的な理念からすると逆説的とも取れるクニヒの発言は興味深い。これは、アートは興味を持たない人へは開かれていないということでもある。アートは複雑なものであつて、一般大衆に向けられるべきではあるが大衆に迎合的（ポピュリズム的）であつてはいけません。

かといって傲慢でもない。プロジェクトは税金で賄われていることから無料で市民に公開されるが、クニヒによればこれらの間に矛盾はない。表現は批判に開かれているが、無関心な人々には開かれてはいない——というより関心を閉ざしている人々には開きようがない。ここでは、「公共性（Opendness）」は、本来の語義からしても特に「開かれていること」つまり「公開性」として理解できるだろう。アートは「社会」に開かれていると同時に開かれていない。「芸術と公共性」をめぐる対立や論争を経て継続してきたこのプロジェクトの担い手であるクニヒの言葉は直截で重い。彼らの社会は、アートの複雑さを受け止める容量を持つ社会ということになるのだろうか。その民主性（民主主義）と公共性についての理解が、どこまで一般性を持ちうるかは定かではないが、こうした言葉と認識に彼の地の（文化芸術の環境としての）市民社会の「一つの成熟を見ないわけにはいかない」とはいえ、「文化芸術は誰のものか」という問いは、彼我を問わず、なお重い問いとしてわれわれの前にある。

（小松田儀貞「社会化するアート／アート化する社会——社会と文化芸術の共進化」）

注

* エスニシティ……………民族性。

* インスタレーション……………作品を単体としてではなく、展示する環境をも取り込んでその総体を芸術的空間として提示すること。

* 表現の不自由展 その後……………さまざまな理由で発表の機会を奪われた作品を集めた展覧会であり、二〇一五年に東京で開催された。

「その後」は、それを更新したものであり、ここでは、国際芸術祭「あいちトリエンナーレ2019」の企画展として開催されたものを指す。

* コンフリクト……………思想・意見などが、衝突すること。葛藤。また、争い、闘争。

* コンセンサス……………意見の一致、合意。

- 4 -

- 3 -